

グラチャニツァ修道院・デチャニ修道院の 至聖所周辺における聖母の予型

—— マリア伝サイクルとの関係において ——

清水 美 佐

The Prefiguration and Life Cycle of the Virgin in the Monasteries Gračanica and Dečani in Kosovo

Misa SHIMIZU

Abstract

This paper discusses the prefiguration of the Virgin in the monasteries Gračanica (before 1321) and Dečani (c. 1350), both located in Kosovo. There are about fifteen surviving Byzantine churches dating from the end of the thirteenth to the fifteenth century that represent Old Testament scenes prefiguring the Virgin Mary. In most of these churches, scenes that prefigure the Virgin have been collected together in one place, and worshipping iconographies (the Virgin and Child, Tree of Jesse, and so on) have been placed in the center of these scenes. However, the Gračanica and Dečani monasteries followed a different program: scenes that prefigure the Virgin are adjoined in a one-to-one relationship with scenes of the life cycle of the Virgin.

In Gračanica, three Old Testament scenes prefigure the Virgin: “Gideon’s Fleece,” “The Tabernacle,” and “Wisdom has Built the Temple.” The Marian cycle depicted in Gračanica is in a deteriorated condition, and some parts have been lost. Hence, the author has reproduced the program of the Marian cycle in Gračanica by referring to the Marian cycle depicted in other churches. It is revealed that there is a one-to-one relationship between the Marian cycle and the prefiguration of the Virgin, as follows: “The Annunciation” with “Gideon’s Fleece,” “Joseph Reprimands Mary” with “The Tabernacle,” and “Trial of Water” with “Wisdom has Built the Temple.”

In Dečani, we also found a combination of “The Annunciation” and “Gideon’s Fleece.” However, in addition to this, the scenes “Presentation of the Virgin to the Temple” and “The Tabernacle” form a pair. This pair represents a liturgical relationship, because Exodus 40, describing the construction of the Tabernacle, is read on the feast day of the Presentation of the Virgin, November 21.

Therefore, because the prefiguration of the Virgin has been related to the Marian cycle, its content is explained through both sets of scenes in the monasteries Gračanica and Dečani.

聖母の予型とは、旧約聖書の特定の事象を、受肉や聖母の処女性として解釈することをいう⁽¹⁾。例えば「マナを入れた壺（出エジプト記 16）」⁽²⁾は、天から降ったパン（ヨハネ福音書 6: 51）であるキリストを胎におさめた聖母マリアに見立てられ、「閉ざされた門（エゼキエル書 44: 1-3）」は、主なる神のほか通ることのない門ということから、神の子を身ごもるおとめマリアの象徴とされる。旧約聖書において語られたできごとを聖母マリアになぞらえ

て、神の容れもの、神と人を結び合わせた存在としてマリアを讃えるものである。

聖母の予型図像は9世紀の余白挿絵詩篇写本が現存最初の作例であり、そこでは預言者の傍らに聖母子のメダイヨンが浮かぶ形式でいくつかの主題が散見される。聖母の予型図像が聖堂装飾に現れるのはさらに時代が下って13世紀後半であり⁽³⁾、オフリドのパナギア・ペリブレプトス Panagia Peribleptos（祝福された聖母）聖堂が最初期の作例であ



図1：グラチャニツァ修道院 ギデオンの羊毛



図2：グラチャニツァ修道院 モーセ単身像

る⁽⁴⁾。聖堂装飾における聖母の予型図像は、通常、予型とされるモチーフ上に聖母子または聖母の半身像を小さく描き込む形式をとり、これが旧約聖書の物語場面中に表される場合と【図1】⁽⁵⁾、旧約預言者が小ぶりの予型モチーフを傍らに携える単身像の場合とがある【図2】。預言者単身像の場合、基本的に聖堂の高い位置に多数の預言者像がまとまって配置される。

聖母の予型図像を有する聖堂のうち、物語場面の図像が2場面以上現存しており、聖母の予型サイクルとして見なすことのできる聖堂のみ表に挙げる【表1】⁽⁶⁾。ほとんどの作例において聖母の予型サイクルは一箇所に集めて描かれており、サイクルの中心となる位置に聖母子像や「エッサイの樹」、「聖顔布」といったイコニック図像を置くことでサイクルにまとまりをつける構成である⁽⁷⁾。

ところが、コソヴォのグラチャニツァ Gračanica 修道院、デチャニ Dečani 修道院の両聖堂においては他の聖堂と異なる構成がなされている。至聖所周辺に配された聖母の予型図像のひとつひとつが、マリア伝サイクル内の場面とそれぞれ一対一に対応する形で配置されているのである。本稿は、剥落の多いグラチャニツァ修道院のマリア伝サイクルを再構成しながら、グラチャニツァ、デチャニ両修道院の至聖所周辺における聖母の予型とマリア伝図像との対応関係を照らし合わせ、聖母の予型主題がどのような文脈によって用いられているかを考察するもの

である。

グラチャニツァ修道院、デチャニ修道院における聖母の予型

まず、両修道院に描かれた聖母の予型主題の内容を確認する。コソヴォのグラチャニツァ修道院は、画家ミハイルとエウティキオスの後継者によって1321年以前に制作され、「聖母の眠り」に捧げられた聖堂である。聖母の予型図像は、至聖所周辺とディアコニコン（輔祭室、南小祭室）に分けて配置されている。至聖所の壁面3段目、北壁から東壁にかけて、「ギデオンの羊毛」（士師記6:36-40）、「モーセの幕屋」（出エジプト記40）、「神殿を建てた知恵」（箴言9:1-11）が横一列に並ぶ【図3】。なお、左右対称となる東壁南端から西壁にも旧約聖書の場面が描かれており、「アブラハムの饗宴」、「旅人を招くアブラハム」、「イサクの犠牲」が並んでいる【図4】。至聖所の手前、テンプロン前の2本の角柱には、壺や燭台を手にしたモーセとアロンが描かれており、至聖所を囲むようにして向かい合っている【図2】。ディアコニコンは聖母礼拝堂となっており、北壁東端に「モーセと燃える柴」、西壁に「炉の中の3人の少年」と「鴉にパンを与えられるエリヤ」がある。

デチャニ修道院パントクラトール主聖堂は、1350年頃の制作であり、グラチャニツァと同じくコソヴォに位置する。デチャニ修道院では、聖母の

表1：聖母の予型画像を有する聖堂のうち、2場面以上が現存する聖堂

壁画制作年代	聖堂名	地域	制作者	聖堂内位置	組み合わせられる主題	備考
1294/95	パナギア・ペリブレプトス Panagia Peribleptos	Ohrid, Macedonia	ミハイルと エウティキオス	ナルテクス	クリスマス讃歌 (聖母子座像)	
14C 初頭	プロタトン Protaton	Athos, Greece	パンセリノス とされる	プロテーシス	不明	
1307-13	ボゴロディツァ・リエヴィシユカ Bogorodica Ljeviška	Prizren, Kosovo	ミハイル	外ナルテクス	エッサイの樹	ほぼ 単身像
1310-14 /1329-34	アギイ・アポストリ Agioi Apostoloi	Thessaloniki, Greece	(コーラ修道院 と類似)	南廊3区画分	エッサイの樹	
1316-18	スヴェティ・ギョルギ Sveti Gjorgi	Staro Nagoričane, Macedonia	ミハイルと エウティキオス	テンプロン 西壁	受胎告知 聖母の眠り	単身像 のみ
1316-21	コーラ修道院 Chora monastery	Istanbul, Turkey	(上記のアギイ・ アポストリと類似)	葬礼用礼拝堂 内ナルテクス	聖母子半身像	
1321 以前	グラチャニツァ修道院 Manastir Gračanica	Kosovo	ミハイルとエウティ キオスの後継者	至聖所 ディアコニコン	マリア伝サイクル 受胎告知	
1337 直前	ベチ総主教座オディグトリア Peć, Hodegetria	Kosovo		ナオス北西ベイ	嘆願の聖母	
1349 (※ナルテクス)	レスノヴォ修道院 Manastir Lesnovo	Macedonia		ナルテクス	命の泉の聖母	
1350 頃	デチャニ修道院 Manastir Dečani	Kosovo		プロテーシス ナオス西ベイ	マリア伝サイクル エッサイの樹	
14C	パナギア・フォルピオティッサ Panagia Phorbiotissa	Asinou, Cyprus		ナオス	聖顔布	
14C 第三四半期	パナギア・ペリブレプトス Panagia Peribleptos	Mystras, Greece		ナオスドーム下	パントクラトール	単身像 のみ
1401	アギオス・ゲオルギオス Agios Georgios	Viannos, Crete		ヴォールト西側	聖母子座像	単身像 のみ



図3：グラチャニツァ修道院 至聖所北壁



図4：グラチャニツァ修道院 至聖所南壁

予型図像がプロテシス（聖体準備室、北小祭室）から至聖所、ナオス（本堂）後方の一角に分けられている。プロテシス北壁に「モーセの幕屋」、プロテシスと至聖所間の柱に「ギデオンの羊毛」「ヤコブの梯子」「格闘するヤコブ」が配置されており、至聖所入口を囲むアーチ・ソフィットには、聖母の予型モチーフを手にしたモーセとアロンが向かい合わせに描かれている。一方、ナオス後方のヴォールトには「神殿を建てた知恵」の4場面があり、その下の南壁には「ダニエルの夢解き」「炉の中の3人の少年」「獅子の穴のダニエル」、西壁には「エッサイの樹」の大構図が接続している。

両聖堂ともに、至聖所やプロテシス内に聖母の予型図像が配置されていることが確認できるが、ここではいずれもマリア伝サイクルの場面が組み合わされている。グラチャニツァではマリア伝サイクルに並行する形で聖母の予型が並び、デチャニではマリア伝サイクルの端に添えられている。

それぞれ図像の対応関係を考察するため、グラチャニツァとデチャニのマリア伝図像を確認してゆくが、グラチャニツァのマリア伝サイクル壁面は全体に剥落が多いため、先に剥落箇所の主題同定が必要となる。グラチャニツァと様式・制作年代のごく近い聖堂として、ストゥデニツァ Studenica 修道院の王の聖堂、スタロ・ナゴリチャネ Staro Nagoričane のスヴェティ・ギョルギ Sveti Gjorgi（聖ゲオルギオス）聖堂のマリア伝サイクルを確認したのち、グラチャニツァ修道院に戻ってマリア伝サイクルの再構成を試みる。

ストゥデニツァ修道院、 王の聖堂（1314/15年）マリア伝

ストゥデニツァ修道院の王の聖堂は、テサロニキ出身の画家ミハイルとエウティキオスの制作とされており、グラチャニツァ修道院と様式の近いものである。

マリア伝は聖堂の壁面中段、アプシス南脇から南壁にかけて、また北壁からアプシス北脇にかけて描かれている。アプシス下部の「使徒の聖体拝領」に隣接する区画から始まり、物語の進行方向はすべて左から右へ整然と進む。「捧げ物の拒否」「ヨアキムとアンナへのお告げ」「金門の出会い」「マリアの誕生」「可愛がられるマリア」までが南側、北側には、「3人の祭司に祝福されるマリア」「聖母神殿奉獻／

天使に養われるマリア」「ヨセフに渡されるマリア」「水の試み」をもってアプシスに戻り、「使徒の聖体拝領」に接続する。「受胎告知」はアプシス上部の逆U字型の区画に描かれている。

スタロ・ナゴリチャネのスヴェティ・ ギョルギ聖堂（1316-18年）マリア伝

スヴェティ・ギョルギ聖堂も同じく、二人組の画家ミハイルとエウティキオスの手によるものである。この聖堂にも聖母の予型図像は描かれているが、すべて預言者単身像の形式である⁽⁸⁾。

マリア伝はプロテシス全体に2段にわたって配置される⁽⁹⁾。物語の順序は単純に左から右には揃っていない。上段の東壁リュネットに「捧げ物の拒否」、上段南壁に「断られた捧げ物を持って帰るヨアキムとアンナ」が続き、その隣は「マリア誕生」が描かれている。上段北壁は、東から「ヨアキムへのお告げ」「アンナへのお告げ」である。西端の一場面は剥落しているが、物語の順からすると「金門の出会い」と思われる。ここから場面は下段に移り、左から右へと進む。北壁の西から「可愛がられるマリア」「3人の祭司に祝福されるマリア」そして「ザカリアの祈りと杖の選出」が描かれる⁽¹⁰⁾。東壁に「ヨセフに渡されるマリア」、南壁に「泉の受胎告知」「マリアを非難するヨセフ」「水の試み」が並ぶ。プロテシスはここまでであるが、続く壁面（テンプル北柱）に「受胎告知」のガブリエルが配置されており、これらと同じ高さにアプシス下部の「使徒の聖体拝領」が並んでいる。

グラチャニツァ修道院マリア伝： 残存箇所の記述と再構成

ここからグラチャニツァ修道院にもどり、マリア伝の残存箇所をたどりながらプログラムを再構成していく。グラチャニツァでは、祭壇を囲む壁面の上段・中段をマリア伝サイクルが占めており、その下に旧約聖書の場面が並ぶ構成である【図3、4】⁽¹¹⁾。ストゥデニツァの王の聖堂、スタロ・ナゴリチャネのスヴェティ・ギョルギ聖堂のマリア伝サイクルを考え合わせると、グラチャニツァ修道院のマリア伝は以下のようなプログラムであったと考えられる【図5】。マリア伝は至聖所南壁のアーチ・ソフィット東側、「ヨアキムとアンナの捧げ物を拒否するザカリア」から始まる。隣接する南壁リュネット左半

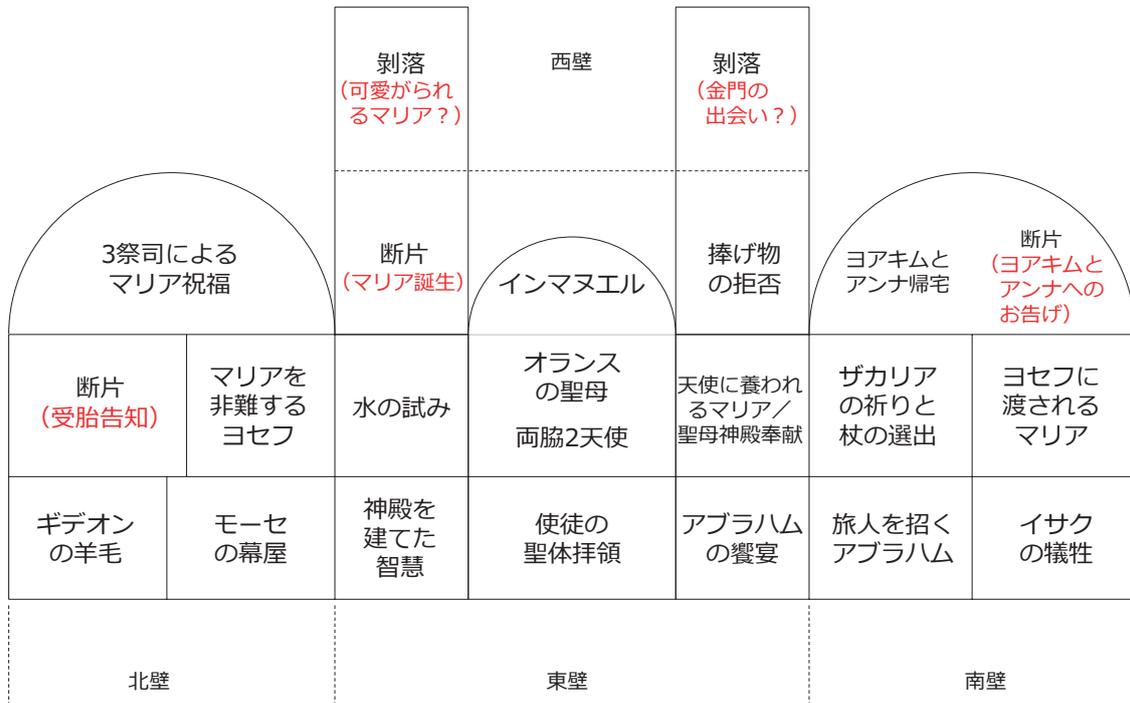


図5：グラチャニツァ修道院 至聖所展開図

分には男女2人の人物が描かれており【図6】、先の場面と同じ捧げ物を手にしていること、衣がそれぞれ赤と薄紫であることから⁽¹²⁾、「捧げ物を断られて帰るヨアキムとアンナ」であることがわかる⁽¹³⁾。リュネット右側には、右向きに座る人物像の腰部分がわずかに残り、そこから先とアーチ・ソフィット西側は完全に剥落している。衣の色から、この人物座像断片はヨアキムと考えられる。背景が椅子ではなく緑色に塗られているため、「荒野のヨアキムへのお告げ」であるだろう。壁面の広さからすれば、リュネット右半分に「ヨアキムへのお告げ」と「アンナへのお告げ」が併せて描かれていたと思われる。アーチ・ソフィット西側には、他の聖堂におけるマリア伝の順序とレパトリーからみて「金門の出会い」があったと推測される。

物語は北壁上段へと移る。アーチ・ソフィット東側はほぼ剥落しているが、場面の右端に建築物、手前に数人の女性たちの小さな頭部が残る。北壁リュネットには「3人の祭司によるマリアの祝福」の半分ほどが残されており、その先のアーチ・ソフィット西側はすべて剥落している。この構図はおそらく「マリアの誕生」の場面であったとみられる⁽¹⁴⁾。とするならば、アーチ・ソフィット西側は「可愛がられるマリア」であるだろう。

物語は南壁二段目に続き、「聖母神殿奉獻／天使



図6：グラチャニツァ修道院 至聖所南壁リュネット 捧げ物を断られて帰るヨアキムとアンナ

に養われるマリア」「ザカリアの祈りと杖の選出」「ヨセフに渡されるマリア」と左から右に進み、再び北壁へ戻る。

北壁の二段目、西端の壁面はほぼ剥落しているが、マリア伝の順序からみて南壁二段目の「ヨセフに渡されるマリア」より後、北壁二段目隣の「マリアを非難するヨセフ」より前となる。この場面には右隅の上部と下部に断片が残されている。上部には建築物と「神の母」という銘がついたニプスの端が残り【図7】⁽¹⁵⁾、下部には椅子と、手前に濃紫の衣の人物像膝下部分が残っている。このことから、場面右側に建築物を背景として椅子の前に立つマリアであることがわかる。この図像の構成は、グラチャ

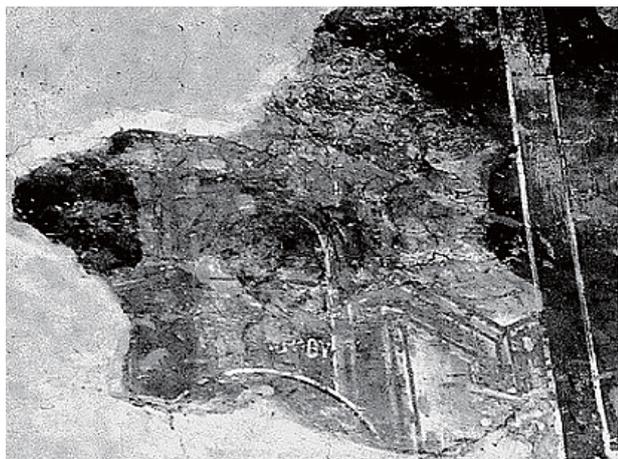


図7：グラチャニツァ修道院 至聖所北壁2段目
神の母の銘断片

ニツァのディアコニコンに描かれた2つの「受胎告知」とも同様であるため【図8】⁽¹⁶⁾、物語順序からも図像の特徴からも「受胎告知」と同定される⁽¹⁷⁾。この右手に「マリアを非難するヨセフ」「水の試み」が続いて、マリア伝が締めくくられる。

聖母の予型図像とマリア伝図像との対応： グラチャニツァの作例

グラチャニツァ修道院では、マリア伝の終わりの3場面と並行するかたちで聖母の予型が3場面組み合わせられている。それぞれ「受胎告知」と「ギデオンの羊毛」、「マリアを非難するヨセフ」と「モーセの幕屋」、「水の試み」と「^{ソフィア}神殿を建てた知恵」が対応している。

「ギデオンの羊毛」は、ギデオンが神に救済のしるしを求めたところ、麦打ち場は乾いたまま羊毛にだけ露がおりたというものである。白く清らかな羊毛をおとめマリアに、天から滴る露をキリストに見立て、露を含んだ羊毛が処女懐胎の予型とされる。また、詩篇71:6「彼は羊毛の上におりる雨のように、地におりる露のように、^{くだ}降られるだろう」も「ギデオンの羊毛」の物語をさす。ここでは「受胎告知」と「ギデオンの羊毛」が上下に組み合わせられることによって、「ギデオンの羊毛」が処女懐胎の予型であり、「受胎告知」によって予型が実現したことが明確に説明されている。

「モーセの幕屋」は、幕屋の内部に置かれる契約の櫃、マナの壺などが聖母の予型である。神の手による十戒の石板を収めた契約の櫃は、^{ロゴス}神言たるキリストを身ごもるマリアに、マナを入れた壺は、天か



図8：グラチャニツァ修道院 ディアコニコン北壁
受胎告知

ら降った命のパンであるイエスを胎に含むマリアに見立てられる。「モーセの幕屋」と「マリアを非難するヨセフ」との対応は、聖母の潔白を疑うという物語主題について関連があるわけではなく、契約の櫃やマナの壺がイエスを身ごもるマリアの予型であるために「イエスを身ごもるマリア」という場面内の共通要素によって繋がれている。「マリアを非難するヨセフ」は、「受胎告知」と「水の試み」の間をもたせる場面として後期のマリア伝によくみられるが⁽¹⁸⁾、聖母の予型図像と組み合わせて描くのはグラチャニツァ修道院の作例のみである。

「^{ソフィア}神殿を建てた知恵」は箴言9:1-11に依るもので、神殿はその内に神が住まうことから神を胎内に宿らせたマリアの予型とされるほか、「来て私のパンを食べなさい、私があなたがたのために混ぜたぶどう酒を飲みなさい」（箴言9:5）の章句から聖餐の予型でもある。グラチャニツァの「^{ソフィア}神殿を建てた知恵」と「水の試み」は、神の住む^{ソフィア}神殿とキリストを身に宿したマリアという共通を持つと同時に、聖体拝領のイメージが含まれている。「^{ソフィア}神殿を建てた知恵」が「使徒の聖体拝領」の壁面に接続していることから、聖餐への呼びかけの要素が強く表されていることが窺える。「^{ソフィア}神殿を建てた知恵」と対称の位置にある「アブラハムの饗宴」も聖餐の予型である⁽¹⁹⁾。ここでは非常に似通った図像で描かれており、左右対称の組み合わせが意識されている。また、その上に描かれた「天使に養われるマリア」も聖餐の予型とみられる主題であり⁽²⁰⁾、とりわけマリアが両手を衣で覆ってパンを受けようとする仕草は⁽²¹⁾、近接する「使徒の聖体拝領」と共通するものである。

このことから、祭壇を囲む旧新約の4主題と「使徒の聖体拝領」とが組み合わせて配置されていることになる²²⁾。

聖母の予型図像とマリア伝図像との対応： デチャニの作例

ここからはデチャニのマリア伝構成を簡単に確認しながら、聖母の予型図像との対応関係を論じる。デチャニは非常に高さのある聖堂で、プロテーシス内の三段にわたってマリア伝が描かれている²³⁾。マリア伝のレパートリーはオフリドのパナギア・ペリプレトス聖堂と同様である²⁴⁾。副アプシス南脇の「捧げ物の拒否」から始まり、南壁に「ヨアキムとアンナへのお告げ」、西壁の小さな区画に「金門の出会い」が描かれる。北壁一段目は西から「マリア誕生」「可愛がられるマリア」「マリアの最初の歩み」と続き、アプシス下部に「3祭司の祝福」、北壁二段目西から「聖母神殿奉献／天使に養われるマリア」、「ザカリアの祈りと杖の選出」「ヨセフに渡されるマリア」と並ぶ。次はアプシス南脇に移り、二段目に「泉の受胎告知」、その下に「糸巻きの受胎告知」がある。この「糸巻きの受胎告知」の右隣に「ギデオンの羊毛」が並んでいる【図9】。

北壁三段目、東端の場面は傷みがひどく、図版では背景の建築物のみ確認される。マリア伝のレパートリーから考えると「マリアを非難するヨセフ」と思われる。三段目中央には「水の試み」が描かれ、マリア伝はここまでである。「水の試み」の左手、「聖母神殿奉献」の下に「モーセの幕屋」が添えられている²⁵⁾。

上述のように、デチャニでは聖母の予型図像がマリア伝サイクルの端に添えられている。「糸巻きの

受胎告知」に「ギデオンの羊毛」が並置されることで、グラチャニツァと同様、処女懐胎の予型が表されている。「糸巻きの受胎告知」において天の弧からマリアに射す光は、「ギデオンの羊毛」の天の弧からおりる露の表現と重なり、意味上でも図像表現の上でも意識的に結び付けられていることが窺える。

一方、「モーセの幕屋」と「聖母神殿奉献」の組み合わせは上記の対応関係とは異なる。この組み合わせは、「モーセの幕屋」が11月21日、聖母神殿奉献の祝日における典礼の朗読箇所であることに起因する²⁶⁾。つまり、図像の対応を作る際に、典礼における朗読箇所が意識されているのである。デチャニ修道院では典礼祭日と朗読箇所との組み合わせが他にもみられ、ナオス後方にある「エッサイの樹」大構図の中では、「ギデオンの羊毛」と「キリストの洗礼」が同じ幹から左右に枝分かれして並んでいる【図10】。「ギデオンの羊毛」が典礼においては1月5日の公現祭、すなわち正教でのキリスト洗礼の

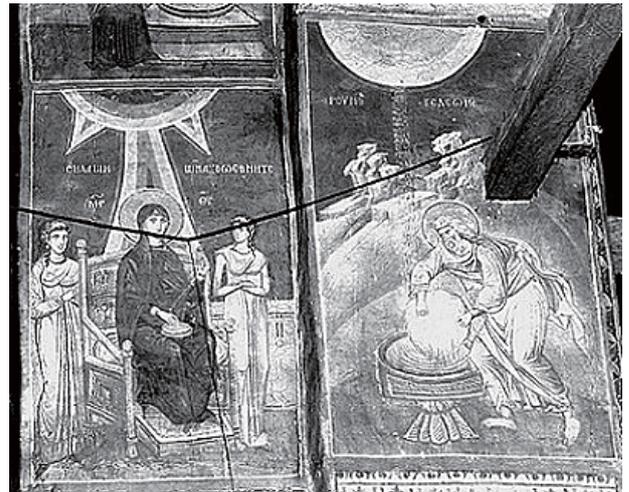


図9：デチャニ修道院 プロテーシス 受胎告知、ギデオンの羊毛



図10：デチャニ修道院 エッサイの樹拡大 ギデオンの羊毛、キリストの洗礼

祭日に朗読される主題だからである。

このほか、至聖所の「ギデオンの羊毛」の向かい側に「格闘するヤコブ」、その隣に「ヤコブの梯子」があるが、こちらはマリア伝の特定の場面と組み合わせられているわけではないようである。ただし、「ヤコブの梯子」は複数の聖母祝祭日において朗読される主題であるため、マリア伝の近くに配置されたものとみられる。「格闘するヤコブ」は通常「ヤコブの梯子」に付属する図像で、2つで1主題と見なすことができる。

「ギデオンの羊毛」と「受胎告知」の対応関係

ここまでグラチャニツァとデチャニのプログラムを考察してきたが、両聖堂の至聖所周辺において、「ギデオンの羊毛」が「受胎告知」と組み合わせられていたことが注目される。この組み合わせは、聖堂装飾に聖母の予型が現れるより以前、中期ビザンティンの写本挿絵に遡るものである。

「ギデオンの羊毛」を聖母の予型として解釈すること自体は5世紀のコンスタンティノポリス総主教プロクロスの説教に遡る。彼は神の母マリアを、「天から降る露に濡れた最も清らかな羊毛」として讃える^[27]。予型図像としての「ギデオンの羊毛」は、ビザンティン中期の余白挿絵詩篇写本が最初期の作例であり、詩篇 71: 6 「彼は羊毛の上におりる雨のように、地におりる露のように、^{くだ}降られるだろう」の挿絵として表される^[28]。9世紀のパントクラトル詩篇では fol. 93v、1000年頃のブリストル詩篇では fol. 115r、1066年テオドロス詩篇には fol. 91v、1092年バルベリーニ詩篇では fol. 119v に表されている^[29]。図像の形式は基本的に、ダビデまたはギデオンが立ち、傍らにある聖母のメダイオンに天の弧

から水が降るといものである。メダイオンは聖母のみの場合と聖母子の場合とがあり^[30]、写本の保存状態によって不明のものもあるが、マリアはギデオンに視線を向け、ギデオンは天の弧を見つめている^[31]。これらのうちテオドロス詩篇の作例では、メダイオンの聖母子だけではなく「受胎告知」が隣に描き込まれている【図11】。「ギデオンの羊毛」が聖母の予型であるというだけではなく、具体的に「受胎告知」と組み合わせられており、グラチャニツァやデチャニの先行作例として見る事ができる。

12世紀、コキノバフォスのヤコボスによる聖母讚詞集は、聖母の予型図像をサイクルとして見なせる最初の作例である^[32]。「ギデオンの羊毛」は、天の弧の下に3区画に分けて表されている【図12】。ギデオンの容貌や動作、描かれるモチーフも、グラチャニツァ修道院・デチャニ修道院と同様である【図1、9、10】^[33]。この場面中に聖母の描き込みはないが、他のフォリオ「モーセと燃える柴」では柴の中に幼子キリストの顔が描き込まれるなど、旧約聖書の物語場面中に聖母や聖母子を描き込む手法がこの段階で既にあることが分かる。写本本文の内容は、ヤコブ原福音書に基づく聖母の生涯前半をたどる説教であり、各章冒頭に全頁大の聖母の予型図像が表されていることから、広義にマリア伝と聖母の予型図像との組み合わせと呼ぶことができるだろう。

同じく12世紀、シナイ山の「パナギア・キコティッサ」のイコンでは^[34]、聖母子座像の周囲を取り囲む預言者たちが聖母の予型モチーフを傍らに携えている^[35]。ギデオンはイコン右下の区画に羊毛を手にして描かれる。中期の写本挿絵以来ある、マリア伝図像と聖母の予型図像の対応関係が、このイコンでは聖母子像の周辺を聖母の予型モチーフと



図11：テオドロス詩篇 fol. 91v ギデオンの羊毛、受胎告知



図 12: コキノバフォスのヤコボス 聖母讃詞集 fol. 110v
ギデオンの羊毛

預言者たちが飾りながら説明する形式に集約されている。14世紀のグラチャニツァ修道院、デチャニ修道院至聖所周辺のプログラムにおいても、こうした構成が受け継がれているといえるだろう。

結論

以上のように、コソヴォのグラチャニツァ修道院、デチャニ修道院の至聖所周辺においては、聖母の予型図像がマリア伝サイクルの場面と一対一の対応関係を持つという、他の聖堂作例とは異なる構成が試みられていた。

マリア伝図像と聖母の予型の組み合わせは12世紀以来あるものだが、聖堂装飾においては14世紀初頭のアトス山プロタトン聖堂においてプロテーシスに聖母の予型が描かれ、1316-18年のスタロ・ナゴリチャネのスヴェティ・ギョルギ聖堂においてプロテーシスにマリア伝が描かれる。その後、マリア伝とともにこれをふちどる形式で、至聖所周辺に聖母の予型とマリア伝を一対一に組み合わせる構成したのがグラチャニツァとデチャニの作例であると考えられる。

マリア伝と組み合わせる図像の選択については、グラチャニツァとデチャニそれぞれの特徴も見受けられた。グラチャニツァ修道院では、場面中の共通

要素やイメージの類似による組み合わせが中心であった。デチャニ修道院では、聖堂内の各所において、典礼の朗読箇所に基づく主題の組み合わせも試みられていた。また、聖母の予型とマリア伝の場面の組み合わせを考察するなかで、グラチャニツァとデチャニの両聖堂に共通するものとして「ギデオンの羊毛」と「受胎告知」の対が注目された。ビザンティン中期の写本、テオドロス詩篇にも表されていたこのペアが、聖堂装飾に媒体を変えても受け継がれていることが確認された。

このように、グラチャニツァ修道院・デチャニ修道院の両聖堂では、聖母の予型が「受胎告知」を中心とした具体的なマリアの生涯と組み合わせられることによって、「み言葉は人となり、私たちのうちに住まわれた」ことを様々なかたちで告げるものとなっているのである。

註

- (1) 聖母の予型解釈が文献に現れるのは4世紀以降である。教父ニューッサのグリゴリオスは、「燃える柴（出エジプト記3:2）」を処女懐胎と受肉の神秘と解釈する。5世紀半ば、コンスタンティノポリス総主教プロクロスの説教には聖母の予型モチーフが列挙されており、テオトコス論争期の聖母の予型解釈を伺うことができる。6世紀のロマノス賛歌、8世紀の教父ダマスコのヨアンニスやクレタのアンドレアスらにより、聖母の予型解釈は隆盛を見せた。「モーセの生涯」『キリスト教神秘主義著作集1:ギリシア教父の神秘主義』谷隆一郎訳（教文館、1992年）；Nicholas Constas, *Proclus of Constantinople and the Cult of the Virgin in Late Antiquity: Homilies 1-5, Texts and Translations*, Leiden 2003, pp.136-147; S. Jean Damascène, *Homélies sur la Nativité et la Dormition*, introduction, traduction et notes par Pierre Voulet, s. j., Paris 1961, pp.104-5; 『ローマノス・メロドスの賛歌』家入敏光訳（創文社、2000年）；Mary Cunningham, *Wider than Heaven: Eighth-Century Homilies on the Mother of God*, New York 2008.
- (2) 本稿で旧約聖書を引用する際は七十人訳の章句番号を用いる。 *Septuaginta: id est Vetus Testamentum graece iuxta LXX interpretes*, ed. by A. Rahlfs, Stuttgart 1952-53.
- (3) 聖母の予型図像については以下を参照。Sirarpie Der Nersessian, “Program and Iconography of the Frescoes of the Parecclesion,” in: *The Kariye Djami*, vol.4, ed. by Underwood, New York 1975, pp.303-49; Branislav Todić, *Serbian Medieval Painting: the Age of King Milutin*, Belgrade 1999, pp.96-107. 次の文献は14世紀中葉～15世紀中葉の中世セルビアにおける聖母の予型表現の変遷について述べたものである。Mirjana Gligorićević-Maksimović, “Иконографија богородиних праобраза у српском сликарству од средине XIV до средине XV века,” *Зборник радова Византолошког института* XLIII (2006), pp.281-317.
- (4) 現地の呼び名ではボゴロディツァ・ペリブレプタとなるが、ギリシア語銘文が書かれたビザンティンの聖堂で

あるため、ギリシア語表記を採用した。

- (5) グラチャニツァ修道院の「ギデオンの羊毛」には、羊毛の上にモノクロームのメダイオン形式で、胸の前で小さく両手をあげるオランス型のマリアが描き込まれている。「小さなオランス型」については以下を参照。菅原裕文『ビザンティン世界におけるエレウサ型聖母子像の受容』(早稲田大学博士論文、2012年) 12-13頁。
- (6) トラブゾン Trebizond/ Trabzon のアギア・ソフィア Agia Sophia 聖堂 (c. 1260) にも聖母の予型主題がまとも描かれるが、予型モチーフの部分の剥落しており、聖母子などの描き込みの有無が不明であるため作例から除いた。
- (7) アトス山 Mount Athos のプロタトン Protaton 聖堂については、図版で聖母の予型図像 3 点を確認できるのみで空間全体のプログラム把握ができなかったため、組み合わせられる主題が不明である。Gabriel Millet, *Monuments de l'Athos: relevés avec le concours de l'Armée française de l'Orient et de l'École française d'Athènes*, Paris 1927, pp.8-9, 32.
- (8) スタロ・ナゴリチャネのスヴェティ・ギョルギ聖堂は、西壁の「聖母の眠り」の場面中に、予型モチーフを伴う小さな預言者たちの半身像が空中に浮かぶという特異な図像を持つ。こうした作例は他にないが、似た図像としては、1401 年クレタ島ヴィアノス Viannos のアギオス・ゲオルギオス Agios Georgios (聖ゲオルギオス) 聖堂において、予型モチーフを伴う小柄な預言者たちが聖母子座像の周囲を取り囲む図像作例が残っている。Τίτος Παπαμιαστοράκης, “Η ένταξη των προεικονίσεων της Θεοτόκου και της Ύψωσης του Σταυρού σε ένα ιδιότυπο εικονογραφικό κύκλο στον Άγιο Γεώργιο Βιάννου Κρήτης,” in: *Δελτίον της Χριστιανικής Αρχαιολογικής Εταιρείας* 4-14 (1987-1988), pp.315-328.
- (9) スヴェティ・ギョルギ聖堂のプロテシスについて、筆者が壁面を確認できたのは東壁の上下 2 主題と北壁の下段 3 主題であるため、確認できなかったそのほかの部分については文献に記載された主題同定をそのまま記述する。Todić, *op. cit.*, p.321; Richard Hamann-Mac Lean und Horst Hallensleben, *Die Monumentalmalerei in Serbien und Makedonien: vom 11. bis zum frühen 14. Jahrhundert*, Gießen 1963, Plan 31. なお、このプランでマリア伝の場面に振られている番号は、物語順序に関わりがないものである。
- (10) スヴェティ・ギョルギ聖堂のマリア伝サイクルにおいて「聖母神殿奉獻」が描かれていない理由が不明である。
- (11) グラチャニツァ修道院の平面・立面図については次の文献を参照。Hamann-Mac Lean, *op. cit.*, Plan 34-36; Slobodan Ćurčić, *Gračanica: King Milutin's Church and its Place in Late Byzantine Architecture*, University Park, 1979. トディチの文献では、主題名の列挙のみではあるが壁面全体の記述がなされている。Todić, *op. cit.*, pp.330-37. 描き起こしについては次のジフコヴィチの文献を参照。ただし、主題同定の誤りや必要なモチーフ、銘、人物の描き落としが諸所にみられるため注意が必要である。Бранислав Живковић, *Грачаница : цртежи фресака*, Београд 1989. このほか、壁面の写真をインターネットのデータベースで閲覧可能。グラチャニツァの至聖所については以下の URL から閲覧できる。BLAGO: Preserve Serbian Heritage, Monastery Gračanica, Altar Area (<http://www.srpskoblag.org/Archives/Gracanica/exhibits/digital/e1-s3s5/index.html>, <http://www.srpskoblag.org/Archives/Gracanica/exhibits/digital/s3-e1e2/index.html>, <http://www.srpskoblag.org/Archives/Gracanica/exhibits/digital/n3-e1e2/index.html>, <http://www.srpskoblag.org/Archives/Gracanica/exhibits/digital/e1-n3n5/index.html>) (2014/07/22 閲覧)。
- (12) グラチャニツァのマリア伝では、アンナの衣を赤、ヨアキムは薄紫、マリアは濃紫、ヨセフは生成りと色分けがなされている。
- (13) ジフコヴィチの描き起こしでは 2 人が手にする捧げ物が描かれず、「ヨセフとマリアが人口調査のためにベツレヘムへ旅する」場面とされている。Живковић, *op. cit.*, VII - SANCTUAIRE, CÔTÉ MÉRIDIONAL, 1. JOSEPH ET MARIE VOYAGEANT À BETHLÉEM EN VUE DU RECENSEMENT. また、BLAGO では「ヨセフとマリアがナザレへ旅する」と書かれており、どちらも誤りである。BLAGO, Monastery Gračanica, Joseph and Mary travel to Nazareth (<http://www.srpskoblag.org/Archives/Gracanica/exhibits/digital/s3-e1e2/s3-e1e2-1.html>) (2014/07/22 閲覧)。
- (14) トディチの文献では疑問符付きで「マリアの誕生」と記される。Todić, *op. cit.*, p.331. 建築物の手前に小さめに描かれた女性が数人並ぶという構図は、通常「マリア誕生」の背景部分でみられるものである。「可愛がられるマリア」の場合、ストゥデニツァの王の聖堂、スタロ・ナゴリチャネのスヴェティ・ギョルギ聖堂では背景に人物がなく、オフリドのパナギア・ペリブレプトス聖堂の場合は背景に 1 人ある。グラチャニツァでは北壁リュネットに「3 祭司」が置かれているため、通常の左から右の場面進行と異なってしまいが、主題の重要度の高さに鑑みれば東側に「マリア誕生」が配置されたと考えられる。
- (15) 註(11)に挙げたジフコヴィチの描き起こしでは、この壁面を「マリア伝の場面断片」とし、「神の母」の銘を書き落としている。また、「水の試み」の場面を「神殿におけるマリア」と書いており、ザカリアが手にする壺が描かれていない。
- (16) ディアコニコンには、副アプシス上部の勝利門型壁面と北壁西端下段にそれぞれ「受胎告知」が描かれている。
- (17) トディチは「受胎告知」を疑問符付きで記しているが、確実なものであろう。Todić, *op. cit.*, p.331.
- (18) 後期によくみられる主題ではあるが、10 世紀カッパドキアのトカル・キリセ Tokalı Kilise 新聖堂にも同様の場面がある。トカル・キリセの銘文はヤコブ原福音書 13:2 のヨセフの言葉、Μεμελημένη Θεῶ, τί τοῦτο ἐποίησας (神の計らいのもとにいるあなたが、何故こんなことをしたのだ) の文言を用いており、後期の同主題の銘文とは異なるものである。『聖書外典偽典 第 6 巻』日本聖書学研究所編 (教文館、1976 年) 102 頁。
- (19) 益田朋幸『ビザンティン聖堂装飾プログラム論』中央公論美術出版社、2014 年、68 頁。
- (20) 同書、388-389 頁。
- (21) BLAGO, Monastery Gračanica, Angel feeds the little Mother of God (<http://www.srpskoblag.org/Archives/Gracanica/exhibits/digital/e1-s3s5/e1-s3s5-3.html>) (2014/07/22 閲覧)。「天使に養われるマリア」が両手を衣で覆う表現は、オフリドのパナギア・ペリブレプトス聖堂、ストゥデニツァ

の王の聖堂においても採用されている。

- (22) なお、至聖所南壁の「ザカリアの祈りと杖の選出」と「3人の天使を招くアブラハム」、「ヨセフに渡されるマリア」と「イサクの犠牲」については、主題の明確な共通項がみられない。図像については、ザカリアとアブラハムの跪拝の姿、杖を持つヨセフとナイフを手にしたアブラハムの姿が似せられている。
- (23) デチャニ修道院プロテシスのプランについてはBLAGOで公開されている。BLAGO, Monastery Dečani, Fresco Layout (<http://www.srpskoblag.org/Archives/Decani/exhibits/fresco-layout/2.html>) (2014/07/22 閲覧)。データベース上の画像番号が振られているが、主題名のリストは掲載されていない。画像番号はマリア伝に関しては物語順につけられている。すべての画像が掲載されているわけではないが、以下のURLから閲覧できる。BLAGO, Monastery Dečani, Prothesis (<http://www.srpskoblag.org/Archives/Decani/exhibits/Frescoes/Prothesis/Apse/index.html>), <http://www.srpskoblag.org/Archives/Decani/exhibits/Frescoes/Prothesis/WestWallwithanArch/index.html>, <http://www.srpskoblag.org/Archives/Decani/exhibits/Frescoes/Prothesis/NorthWall/index.html>, <http://www.srpskoblag.org/Archives/Decani/exhibits/Frescoes/Prothesis/SouthWall/index.html>) (2014/07/22 閲覧)。プロテシスの北壁全体については次の図版を参照。Vladimir R. Petković, *La peinture serbe du Moyen Age*, Beograd 1934, PL. CXXXIV.
- (24) Jacqueline Lafontaine-Dosogne, “Les cycles de la Vierge dans l’église de Dečani: Enfance, Dormition et Akathiste,” in: *Дечани и византијска уметност средином XIV века : међународни научни скуп поводом 650 година манастира Дечана*, ed. Војислав Ј. Ђурић, Београд 1989, p.307.
- (25) マクシモヴィチの以下の論文では、デチャニの「モーセの幕屋」を中心に図像の源泉と発展が論じられる。Mirjana Gligoriјевић-Максимовић, “Скинија у Дечанима – порекло и развој иконографске теме,” in: *Дечани и византијска уметност средином XIV века : међународни научни скуп поводом 650 година манастира Дечана*, ed. Војислав Ј. Ђурић, Београд 1989, pp.319-37.
- (26) 典礼祭日における朗読箇所と典拠として、本稿では次の文献を用いる。Juan Mateos, *Le Typicon de la Grande Église: ms. Sainte-Croix no. 40, Xe siècle*, vol.1, Roma 1962. なお、グラチャニツァ修道院ではディアコニコンにおいて「モーセと燃える柴」と「受胎告知」が組み合わされており、予型の意味と典礼の朗読箇所がともに対応する組み合わせである。
- (27) Nicholas Constan, *op. cit.*, pp.137-8. 註(1)も参照。
- (28) 写本・聖堂装飾における「ギデオンの羊毛」のイコングラフィーについては以下を参照。D. Mouriki, “Αἱ Βιβλικά Προεικονίσεις τῆς Παναγίας εἰς τὸν Τροῦλλον τῆς Περιβλέπτου τοῦ Μυστρά,” *Ἀρχαιολογικόν Δελτίον* 25 (1970), pp.217-51 and 267-70. ギデオンの図像については同論文 228-29 頁。
- (29) 辻絵理子『ビザンティン余白詩篇研究——『テオドロス詩篇』とストゥディオス修道院工房』(早稲田大学博士論文、2012年) 254 頁; Suzy Dufrenne, *L'illustration des psautiers grecs du moyen âge I: Pantocrator 61, Paris Grec 20, British museum 40731*, Paris 1966, p.28, PL.12, fol. 93v;

Sirarpie Der Nersessian, *L'illustration des psautiers grecs du moyen âge II: Londres, add. 19.352*, Paris 1970, Pl. 54, fol. 115r; C. Barber (ed.), *Theodore Psalter: Electronic facsimile*, British Library, 2000, fol. 91v. なお、筆者はバルベリーニ詩篇の「ギデオンの羊毛」図像について未確認である。

- (30) パントクラートル詩篇では小さいオランスの聖母が、ブリストル詩篇では下部剥落により聖母のみ確認でき、テオドロス詩篇では聖母子が描かれる。
- (31) 預言者と予型となる聖母との視線が交差しないという描かれ方は、聖堂装飾の聖母の予型図像において全般にみられるものである。
- (32) コキノパフォスのヤコボスによる聖母讃詞集における聖母の予型論については以下の文献を参照。特に「ヤコブの梯子」「モーセと燃える柴」「ソロモンの床」「イザヤと炭火の浄め」についての考察である。Kallirroé Linardou, “Depicting the Salvation: Typological Images of Mary in the Kokkinobaphos Manuscripts,” in: *The Cult of the Mother of God in Byzantium: Texts and Images*, ed. by Leslie Brubaker and Mary B. Cunningham, Farnham 2011, pp.133-49. 同写本については以下を参照。『聖母マリア讃詞集 Vat. Grace. 1162』岩波書店、1997年; Suzy Dufrenne, “Homilien des Jakobos von Kokkinobaphos” in: *Biblioteca Apostolica Vaticana: Liturgie und Andacht im Mittelalter*, Stuttgart 1992, pp.132-37.
- (33) 写本におけるギデオンの容貌については以下の文献を参照。複数のパターンがあったものが、11~12世紀までには長い白髪白髯の老人の姿が基本となったとされる。Leslie Brubaker, *Vision and Meaning in Ninth-Century Byzantium: Image as Exegesis in the Homilies of Gregory of Nazianzus*, Cambridge 1999, p.350. 聖堂装飾の「ギデオンの羊毛」においては、グラチャニツァとデチャニでは長い白髪白髯の老人の姿で描かれるが、テサロニキのアギイ・アポストリ Agioi Apostiloi 聖堂では禿頭に短い白髯、膝の出る短い衣で描かれており、レスノヴォ Lesnovo 修道院のギデオンは頭部が剥落しているもののアギイ・アポストリとよく似た図像である。14世紀においても、ギデオンの容貌には複数の系統が残っていたとみられる。
- (34) 益田朋幸、前掲書、477-504 頁。
- (35) 聖堂装飾では、1401年クレタ島ヴィアノスのアギオス・ゲオルギオス聖堂、ポストビザンティンではあるが1494年キプロスのプラタニスタサ Platanistasa にあるスタヴロス・トゥ・アギアズマーティ Stavros tou Agiasmati 聖堂も同構図を持つ。註(8)も参照。

図版出典

- 図1、10：益田朋幸氏（早稲田大学）撮影。
 図3、4、6、7、9：菅原裕文氏（早稲田大学）撮影。
 図11：C. Barber (ed.), Theodore Psalter, British Library, 2000.
 図12：Biblioteca apostolica vaticana: Liturgie und Andacht im Mittelalter, Stuttgart 1992, p.136.
 その他については筆者撮影と作成。